

第2回 汐見稔幸先生を囲んで語る会

今一番大切なことが聞けて、気軽におしゃべりできる会

報告

● はじめに
標記企画が9月7日の第1回に続いて第2回として開催された。

名称：第2回 汐見稔幸先生を囲んで語る会
テーマ：「子育て新システムと園の運営を考える」

- ・ まだまだ語らなくてはいけない「子ども・子育て新システム」のゆくえ
- ・ 3.11 大震災から考えなければいけない保育や子どもの未来像

会場：呉羽山山頂 喫茶店マリーマリー

日時：2011年11月13日（日）13:30～16:00

参加者：10人

（富山5人、新潟1人、高山1人、東京3人）

● 主催者挨拶 by 早川氏

汐見先生をはじめ皆様、保育士の全国大会（11/12-13）にご参加された帰りに、当該企画にご出席いただきましてありがとうございます。せっかく汐見先生が富山にこられるなら、富山の方々との語り合いをぜひ、と思って企画しました。自由に語り合えればと思いますので、皆様方よろしく願いいたします。



● 論議

早川氏が論議の口火をきり、汐見先生がそれに従って、幼保教育について、問題点を発掘しながら、将来に向けてのビジョンを語られた。ここでは、論議対象を大きく三つに分け、話し合われたことを列挙することにした。ただし、内容については、編者の感想にもとづくまとめとなっていることをお断り申し上げます。

<1> 精神病理について

西洋合理主義の医学では、精神的疾患に対応できな

い。精神疾患については、この症状にはこの薬、あの症状にはあの薬といったように、薬を投与することで治療が行われているが、本来は患者の頭脳の回路が円滑に動くようにアシストすることにあるのではないか。そこに、人間的なふれあいとかコミュニケーションが必要と考えられる。発達障害の場合でも、症状のみを抑えこむように薬投与があるが、もっと違うアプローチがあるはずである。

<2> 本能的なものから文化的なものへ

人間は動物である。小さいときには動物としての本能行動が多々あるが、成長に合わせてそれらが退化し、あわせて大脳皮質によるいわゆる文化的な行動をしていく。ところが、今の子どもには本能的なものをなしにして直ぐに文化的なものに頼るので、いびつな大人になっていくのではないだろうか。じゃれつき遊びとはまさに本能的というか動物的行動なのである。こうしたことをうまく文化的行動につなげていくことが、のぞまれている。若い研究実践者はこのことを理論化して確たるものにして欲しい。

<3> 形先行の教育

今保育では、〇〇式保育とってがむしゃらに訓練をさせる（例は逆立ちをさせたり）ことで保育の売りになっている。そこでは子どもは受身的になり自発性が失われている。しかし、世の中の親や教育関係者は、一芸に秀でる保育としてもてはやしている。大きな間違いである。子どもは自由にのびのびとさせてあげるべきである。

あいさつうんどうもしかり。何のためのものかが不明確でただ形だけでは、もちろんだめである。

保育の評価としてトップ管理者の評価にゆだねるようになろうとしているが、管理が厳しくなると、そのことに対して現場が対応することにもなりかねない。注意すべきである。

● 上記話題のほかには保育大学などの話題があり、伝えきれないことが残念である。最後に大いに盛り上がったことを記しておく。有意義な語りの会となった。



座談風景



皆さんでにっこり